

資料 1

つなぐ思い ―エルトゥールル号―

明治23年(1890年)9月16日、夜のことだ。当時の榎野崎灯台は難所である熊野灘の守りとしての大きな役目があり、特にこのような暴風の夜には、当直の職員の緊張が続いていた。あたりは真っ暗で風の音が灯台の官舎を大きく揺らす。職員は、

(嵐よ、早く過ぎ去ってくれ。明日は、晴れてくれよ。)

と願うばかりであった。

「ドンドンドン。」

午前10時半ごろ、突然入り口のドアが激しく叩かれた。すると、びしょ濡れで、服も裂け血まみれとなった異国の男が倒れこんできた。

(これは大変なことだ。)

言葉は通じずとも恐ろしいことが起こったと直感した。職員は本を持ってきて、男に国旗を指さすように促すと、トルコの国旗を指さした。彼はエルトゥールル号に乗船していたトルコ兵だった。彼の身振り手振りから、まだたくさんの者が救出を求めていることがわかった。

職員は、吹き飛ばされそうな嵐について榎野区長に急を知らせた。また、海難事故に気付いた榎野の人たちも集まり、地区をあげての救出が始まった。目もくらむような崖をはい上がってきた人、村人に背負われ救出された人等、明るく朝までに69名にふくれあがっていた。

トルコ兵の多くは服が裂け、傷つき疲れ切っていた。

「大変だ、かなり体が弱っているぞ。」

「ありったけの食料と着物を持ってこい。」

榎野の人々は、必死だった。

榎野は当時60戸ほどの小さな集落で、蓄えはほとんどなかったが、貴重な米、収穫を待つばかりになっていた畑の芋、さらに家で大事に飼っていた鶏まで救出したトルコ兵のために食事として与えた。同時に、夜通し遭難者の捜索も続けていた。

「食料も人でも足りない。榎野だけでは無理だ。他の村にも助けてもらおう。」

榎野区長は、大急ぎで隣の須江区長に応援を求め、その足で大島村長のもとへ向かった。

「大変なことだ。急がねば。」

知らせを受けた大島村長は、島中の医師を集め、村役場に保存してあったビスケットや魚の缶詰等の非常用の食料を船に積み込み、万一のために用意していた現金を手に、まだ高い波が残る中を榎野へ急行した。

翌日、トルコ兵たちをより大きな蓮生寺に運び、看護と世話をを行った。この最初に救われた69名の将兵たちは、医師や村人たちの懸命の介護の甲斐あって一人も命を落とすことなく、9月19日に大島を発った。

生存者が離島した後も、大島の人たちは助からなかった人たちの遺体の捜索、収容、そして葬る作業を一か月近く続けた。

9月22日、手当てを行った医師たちに、明治政府から「薬代及び治療代の精算書を作成せよ。」との命令が伝えられた。医師たちは、

「負傷者の惨状を見かねて治療を行ったのであり、治療費を請求するつもりはございません。薬代及び治療代はすべて義えんといいたたく、よろしくお取りはからいただきますようお願いいたします。」

と報告した。